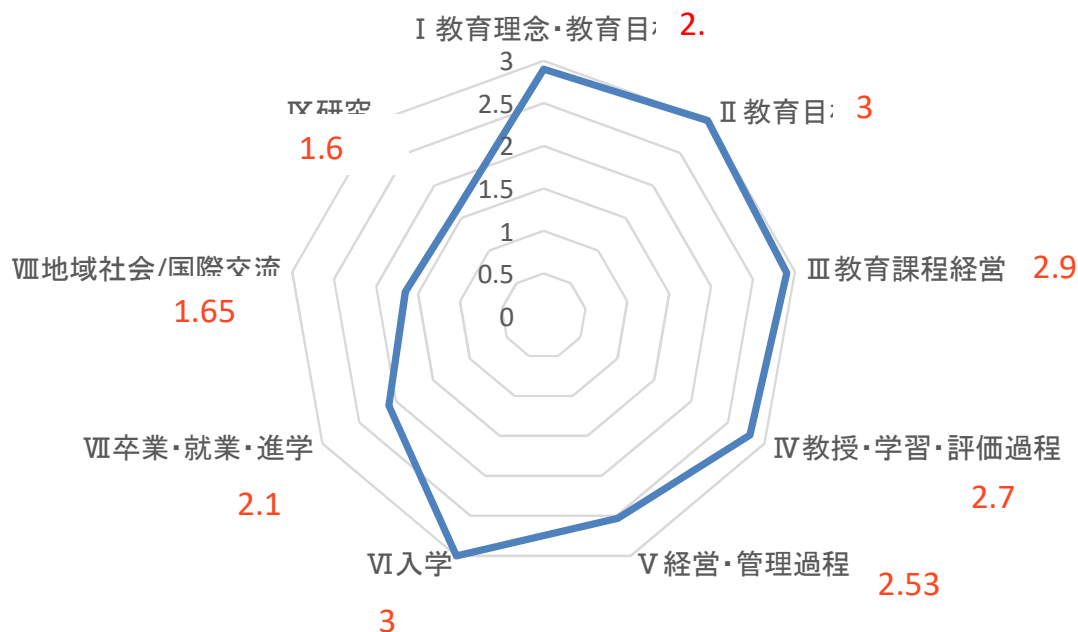


令和4年度 学校自己点検・自己評価



I. 教育理念・目的・目標

令和2年に公布された「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」の一部を改変する省令に則り、令和4年度入学の学生から電子書籍を導入した。そこで、シラバスや学習教材また、学生への連絡、健康チェック等についてもタブレットを用いて行い、ICT活用能力の向上を図っている。また、新カリキュラムでは、地域・在宅を強化するため、地域包括ケア実習を追加し、地域で生活する人(様々な発達段階)を捉え、看護師の支援について考えられる内容を盛り込んだ。また、教育理念や教育目的においては、当校は近隣の病院が設置主体となっているため、地域に貢献できる学生を育成するということを意識したものとした。

II. 教育目標

旧カリキュラムでは、シラバスの中に卒業生の特性について具体的に示されていなかったため、新カリキュラムでは、それぞれの授業目標の中に卒業生の特性を入れ、学生がシラバスを確認することで授業目的を具体的に抑えられるようにした。また、新カリキュラムでは、教員全員で用語理解をしながら、教育目標が、教育理念・教育目的と一貫性があるものとした。

III. 教育課程経営

令和元年度に作成した東群馬専門学校学校評価規程に基づく学校関係者評価に関してはコロナ過により臨地実習施設関係者や卒業生代表の参加はできず、学内関係者のみの評価となった。今後はコロナ過であってもzoomなどを活用し評価を継続して行う必要がある。しかし、新カリキュラムでは、教員全体で再編成に取り組んだことから、教育理念・教育目的の達成に向け、一貫した活動が行えていると考える。教育計画や科目・単元構成・評価についても学生便覧やシラバスに明確に示されていることから、教員、学生ともにわかるものとなっている。

教員の教育・研究活動についてはコロナ過により研修会への参加があまり出来ていない状況ではあるが、zoomによる研修などには積極的に参加できるようにした。また、教員の経験年数や専門性を活かし、担当科目や時間配分を行った。

臨地実習では、実習目標を達成できるよう、教員と指導者が協力し指導できるよう各領域で指導指針を作成している。また、関連病院以外の施設に対しては、昨年度同様に実習評価をフィードバックしている。今年度も関連施設への実習評価についてはフィードバック出来ないため、指導者会などを通してフィードバックしていけるよう努めていきたい。

IV. 教授・学習・評価過程

コロナ過と言うこともあり、zoomを活用した講義や臨地実習から学内実習へ一部変更になった授業科目もあったが、必要な授業はすべて実施することが出来た。新カリキュラムでの授業となった31回生については、カリキュラムを組む段階で、基礎となる科目について授業時間を旧カリキュラムより増やしたことにより、学生への負担が多くなってしまい、3月になっても授業が詰め込みになってしまった経緯がある。事業評価としては時間が増えたことによる効果は期待できなかったことから、新カリキュラムでの基礎科目については次年度に向け調整をかける必要がある。授業評価については、各單元ごとに学生からの授業評価をとり、次年度に向け担当教員が分析し授業改善ができるようにしている。また、専任教員は毎回授業後に授業内容に対する学生の意見を振り返り用紙を用いて行い、学生の質問等にも対応できるようにしている。

V. 経営・管理過程

全体的な評価は高くなっているが、施設設備の整備や自己点検・自己評価体制については低評価な項目があった。また、留年者が増加傾向にあることから財政状態への影響も少なくない。受験生が大幅に減少していることから設立母体である関連病院の意見を参考に中長期的な経営方針を協議検討していく必要がある。施設設備に関しては、開校から30年が経過し、設備の修繕や改修などを計画し、実施していく必要がある。

VI. 入学

群馬県、栃木県、埼玉県の高校へのガイダンスを行い、当校の教育理念・教育目標について説明を行い学生募集をしている。また、指定校に出向き、看護師志望の学生に対するガイダンスや出前授業等を行っている。今年度は公募推薦も取り入れ、例年行っている社会人入試も行い70名の定員は確保できた状況である。

VII. 卒業・就職・進学

当校の特徴として、設置主体が近隣の病院であることから学生の80%以上が設置主体である病院の奨学生であり、卒業後は奨学施設への就職となっている。奨学施設とは実習指導者会議等により情報共有を行っている。また、奨学施設の看護部長とも連携し学生状況の共有を図っている。しかし、卒業生に対する活動状況に関しての調査等を行っていないため、卒業後の就業状況についてさらに病院との情報共有を図り実態調査を行えるような体制づくりが必要である。

VIII. 地域社会／国際交流

コロナ過により以前行っていた地域施設へのボランティア活動は行えていない状況である。しかし、新カリキュラムでは、東毛地区の特徴を取り入れた学習内容を取り入れた。また、地域で生活している生活者を捉えた実習を盛り込んだ。国際交流に関しては、コロナ過より、海外で活躍している卒業生からの状況提供は出来ていない。東毛地区の特徴として、南米や中国国籍の人も多く生活している。また、当校の学生の中には、南米や中国国籍の学生も入学してきている。そのため、外国語として中国語やポルトガル語の授業を取り入れ、地域の病院や施設で今後勤務したときに対応できるような学習内容としている。

IX. 研究

看護教育研究会による領域別活動に参加し、それぞれの領域での研究活動を実施している。しかし、コロナ過により、学会への参加については出来ていない状況である。学内での研究の取り組みについては、時間確保が難しい状況であるため、看護教育研究会で実施している領域別での研究活動に教員が積極的に参加できるよう支援していきたい。